

- IUCN レッドリスト改善に向けて-

(独) 水産総合研究センター
国際水産資源研究所
国際資源研究員 宮部 尚純
所長 魚住 雄二

はじめに

今回の Red List に関する IUCN の発表によると、まぐろ類では全 8 種類中 3 種 (大西洋くろまぐろ、みなみまぐろ、めばち) が絶滅危惧種とされ、2 種が準絶滅危惧種とされた。

絶滅危惧の全くないまぐろ類がどうしてレッドリストに載ることになったのか、その明白な誤りの源を解説し、レッドリスト掲載に関するクライテリアやその運用法の改善を提案する。

その前に、IUCN レッドリストに用いられているカテゴリーと評価に用いられるクライテリアについて概略説明をする。IUCN のレッドリストには、絶滅危惧の度合いを基に 9 つのカテゴリーが設けられている。絶滅危惧の度合いを示すカテゴリーとしては、3 つのカテゴリーがあり、最も危惧の大きなものから、**Critically Endangered (CR: 深刻な危機)**、**Endangered (EN: 危機)**、**Vulnerable (VU: 危急)** が挙げられる。この 3 つのカテゴリーへ分類された種が、「絶滅危惧種」と言われる。

どのように評価するのか?

IUCN ではどのような情報を使って資源状態を評価し、カテゴリーに分類するのか。絶滅危惧の大きさを評価しカテゴリーへ分類するために IUCN は、以下に示す 5 種類のクライテリア (基準) を用いている。

クライテリア A : 急激な個体数の減少

B : 狭い分布範囲

C : 小集団

D : 特に小集団

E : 絶滅確率

これらのクライテリアごとに、明瞭な数値範囲が示されているし、評価の際に用いる詳細な技術的ガイドラインが整備されている (IUCN, 2008)。まぐろ類を含め漁業資源で問題になるクライテリアは、クライテリア A と呼ばれる個体数の減少率 (減少スピード) を用いた基準である。クライテリア B から D まででは、分布範囲では 2 万 km²、そして、小集団

と呼ばれるものでは、成熟個体の個体数が最大でも 10000 尾以下と言った極めて小規模なレベルであるため、如何に乱獲されたミナミマグロや大西洋クロマグロにもこれらのクライテリアは、そもそも適合しない。

IUCN レッドリストの問題点

このクライテリア A が漁業資源で問題となるのは、このクライテリアを適用すると極めて多くの資源が、絶滅危惧種と判定されてしまうからである。クライテリア A に対する多くの批判をまとめると以下のようなものである。

全ての国際的なまぐろ類管理機関では、MSY（最大持続生産量）を達成することをその目的としているが、理論的にはこの MSY が達成されるのは、初期資源の半分に減少した時である。一般的にはこの MSY 水準が維持されるのが理想であるとみなされる。しかし、IUCN のクライテリアではそうではなく、MSY 水準に達すれば絶滅危惧種と見なされるのである。

この批判をより具体的に示せば、例えば、中西部太平洋には約 20 万 8 千トンのメバチ親魚量があるとされ、一尾あたりの体重を平均 30kg とすると 700 万尾のメバチ成魚が現在も存在することになる（Harley,S 他,2010）。これだけの資源量があれば、資源が絶滅する確率は 0 であるに等しい。

しかし、この批判は、MSY レベルを大きく割り込んでしまったミナミマグロや大西洋クロマグロ資源については的確性を欠く。三宅(2011)は、問題の本質を端的に指摘している。すなわち、減少した結果 500 個体になってしまった種と、一方、減少しても 700 万尾もいる種の将来の絶滅リスクが同じだと評価するシステムそのものが誤っているということである。当該種の減少率のみでは、将来の絶滅確率は推定できない。正しく推定するためには、少なくとも親の現存量も必要である、ということである。

今回の Red List に記載されたミナミマグロ、大西洋クロマグロ、メバチでは、現在でも未だ膨大にある現存量を無視し、減少率のみで評価されたことによって絶滅リスクの大きさをとんでもなく過大評価されたことによって生じた明らかに誤った評価なのである。

では、どうして、減少率だけを使うことになったのか。それは、絶滅に瀕した生物の情報は、特に定量的な情報はほとんどないことが普通なためなのである。そのため、減少率だけでもあればましと言った状況の中で、更に現存量までも要求するのは現実的でないことが主な理由であった。そして、保全生物学者としては、予防原則の下で、第 2 種の過誤（絶滅危惧種であるのにそうでないと判断する誤り）を避けるために、敢えて第 1 種の過誤（絶滅危惧種でない種を絶滅危惧種と判断する誤り）を容認したということである。

現存量が不明な場合はこのようなやり方もやむをえないであろうが、現存量が分かって

いる場合、敢えてそれを無視して、第1種の過誤に甘んじるのは、科学的でも、合理的でもないことは明白である。使える情報は最大限使うのが科学と言うものであろう。

IUCNのレッドリストガイドライン (IUCN,2008) には、上記の批判に対する釈明ともいえる考えが示されている。すなわち、MSY レベルにまで減少した資源が、クライテリア A によって絶滅危惧種に判定される場合があるが、これは、中長期的には問題なく、もし、しっかりと持続的に管理され、資源が安定すれば、そのうちリストから外されることになることを主張している。つまり、絶滅危惧でない種が掲載されるが、しっかりと管理されていれば、そのうち除外されるので問題はないと言っているのである。

しかし、どんな言い訳があれ、誤った結果を公表することによる混乱への責任はどうか。本質的なことを隠匿し、敢えてセンセーショナルな部分のみを強調するような IUCN の発表の仕方については、今後速やかに見直されるべきである。

上述したようなクライテリアに関する問題は、IUCN レッドリストだけの問題ではなく、CITES (ワシントン条約) のクライテリアでも全く同じである。2010年のCITES会合で問題になった大西洋クロマグロの付属書掲載問題にも全く同じ本質的な誤りがある(魚住、2010)。

確かに、資源管理上、MSY レベル以下になってしまった資源には問題がある。しかし、この乱獲と言われる問題を「絶滅危惧」と言う問題にすり替えるのは、明らかな誤りである。

結びにかえて

現状のレッドリストクライテリアは、上述したような大きな欠陥を持っている。そのため、レッドリストを鵜呑みにはできない。特に、漁業が、現在、利用している資源については、レッドリストの内容は疑ってかかる必要がある。

IUCNは、少なくともクライテリアそのものを改善するか、その運用を変更すべきである。既に、Matsuda 他(1997)は、現存量をクライテリア A に取り込んだ簡便的なクライテリア E を提案した。これを用いれば、現存量が分かっている種に対しては、絶滅危惧リスクの過大評価をかなり補正することができる。明白に誤った結論が出ているにもかかわらず、上述したような言い訳に近い解釈で、一般の人々を大いに惑わす結果を発表することは、どんな言い訳を加えても決して正しいことではない。このようなことを続ければ、レッドリストそのものの信用が失われ、Nature 誌に掲載された Mrosovsky 博士の主張するように IUCN の信用こそが絶滅に瀕することになる(IUCN's credibility is critically endangered)。

今回リストに掲載されたまぐろ類に絶滅する危惧はまったくない。多くの情報を用いて行われている国際漁業委員会の資源評価結果を見れば明白である。

しかし、未来永劫楽観視できるかと言われればそうでもない。ミナミマグロも大西洋クロマグロも明らかに乱獲されている厳しい状態が今も続いている。太平洋のメバチは、過剰漁獲が今も続き、それを防ぐために規制が導入されてはいるが、島嶼国等に対する除外規

定等が多く、実質的な規制の効果を望める状態ではない。それに加えて、台湾をはじめとする諸外国は、まき網船団を更に増大させ、メバチ資源の悪化に一層の追い打ちをかける状態が続いている。このような状態が続く現状から一日も早く脱却しなければ、レッドリストや CITES 付属書掲載をはじめ、過剰な保護を訴える運動が再びおこり、合理的利用の道が閉ざされる可能性さえある。

我々が、力強くはっきりとまぐる類は絶滅しないと言い続けられるためには、しっかりと効果的な規制が導入、実施され、文字通り持続的な利用が実現されていることが大前提となることを決して、忘れてはならない。